

6 質疑応答

○上西 人文社会研究科の院生の上西と申します。本日は大変興味深いお話をありがとうございました。市村さんと寺田先生にそれぞれお聞きしたいことがあります。まず、市村さんへの質問です。工学・情報理工学図書館という組織が、一つの部屋としてあるのではなくて、複数の各分野の図書室の集合体として存在している、というお話がありました。そのように各図書室の集合体として活動しているということの、プロジェクトを進めていく中での

強みや、あるいは、逆にそれ故の難しさがあつたら教えていただきたいです。それから、寺田先生にも、同じような質問になりますが、総合研究資料館が最初できたときには、東京大学全体の学術標本を資料館で集中的に管理していくという構想があつた。けれども、人的、スペース的に実現が難しい中で、資料部の中の各部門に主任の先生がいる現在の形ができてくる、というお話だったかと理解しています。専任の教員や職員が運営している研究部以外に、学部横断的な形で資料部の各部門があることのメリットや、それを運営することの難しさがあつたら教えていただきたいです。

○市村 市村です。どうもありがとうございます。やはり組織を作るというのがすごく難しいと思います。実際、工学・情報理工学図書館だけではなく、東京大学附属図書館というのも3つの拠点図書館と27の部局図書館の計30の図書館からできている。それと同じように、どう調整するか、きちんと調整して仕事を進める。またお金の話で、はしたない気もするのですが、工学・情報理工学図書館で言えば、各専攻から頂けるお金もある、図書館として頂けるお金もある、そういうことで、バーチャルではあるけれど、図書館として一つに調整して仕事をするというところは、現在の大きな強みだと思います。弱みで考えると、やはり人事異動です。必ずしもいろんな知識、情報を持った職員が配属されるわけではない。そこをどうレベルを落とさずに、全体で持ち上げていくか、その部分をつくり上げていくというのが、弱みというか、頑張らなくてはいけないところだろうと思います。ですので、本当に横展開をする、仕事の横展開ができるチームワーク、それをつくっていくのが強みにつながっていくポイントではないかと考えています。

○寺田 私も本研究会の機会に、総合研究資料館から博物館へという、自分の所属する組織の沿革をあらためて振り返りました。当初から掲げられていた、研究を一番に重視するということは、資料館を立ち上げたときからの理念・方針として、ずっと通底して引き継がれてきて、今に至ると感じて

います。ただし、一方で、もっとたくさんの人を備え、スペースもどんどん拡大し、学内の資料を全てそこに集約するような研究資料センターをつくらうとしていた最初の構想は完全には実現していないわけです。それについては、理想どおりに、当初予定していた面積が仮に獲得できていたとしても、その後の学術標本の集積や収集のスピードがはるかに大きくなっているという問題が新たに出てきているのではないかと思います。

総合研究博物館だけでなく、博物館だけでもなく、おそらく人類にとって、モノをどこまで残していくのか、またそのためのスペースをどのように確保するのかは大きな問題だと思われます。私は博物館にいる人間なので、できるだけ残したほうが良いというのが基本的なスタンスではありますが、限りある地球の資源の中でどのようにしていくのかは、本当にもっと大きなレベルで考えていかなければならない問題でもであると、本日の市村さんのお話を聞いて感じたところでした。

やや話が広がってしまいましたが、総合研究博物館に研究部以外に資料部があるという組織構成のメリットと組織運営の難しさというご質問に対しては、まずメリットとしては、市村さんもおっしゃっていましたが、仕事を横に展開していくチームワークというものができるのは、やはり組織がある程度大きく多様であるからこそだと思います。資料部の各部門主任を学内各部署の教員が務めているため、その存在によって、自然と学内での横連携が実現できている部分も大いにあるのではないかと思います。

一方、資料部門の構成が資料館時代から変わっていないことは、組織運営の難しさとなっているのではないかと考えられる面もあります。研究動向の変化により、学術標本の注目の集め方や利用方法は変わってくるため、組織が変わりゆく状況に対応しきれていない部分はどうしてもあるのではないかと思います。

ただし、今の時点で学術標本の利用頻度があまり多くない資料部門が仮にあったとしても、それを簡単に無くしてしまうのは早計だと思われます。最近耳にした話で私が興味深く思ったのは、植物部門の標本をこれまでも高頻

度で利用してきた理学部の学生だけでなく、これまであまり標本利用のなかった、農学部で生態を研究している学生が見に来る機会がこのところ増えているとのことです。学問の趨勢は、いつどこに流れがくるか分からないという側面があるので、やはりモノをきちんと保存し、管理を行い、いつでも研究利用できる状態にしておくことは大学博物館として大事な仕事だと実感しました。そういった意味でも、資料館設立当初から存在してきた資料部門を維持していくことにはメリットもあるのではないかと思います。

○上西 大変具体的で興味深いお話をいただきまして、ありがとうございました。

○鈴木 それでは、その他の方々で、いかがでしょうか。最初にも声をお掛けしたんですが、ヨーロッパでの日本の工学技術の研究の第一人者であるエーリッヒ・パワー先生が、わざわざフランスから参加してくださっているので、パワー先生、何かコメントいただけますでしょうか。

【エーリッヒ＝パワー教授のコメントは、当日通信事情の関係で聞き取りにくく、後日改めて文章でコメントをいただき、またやや長くなりましたので、当日の記録の次、本稿の末尾に掲載します。】

○鈴木 パワー先生、早朝の時間にご参加いただき、誠にありがとうございました。やはりこういう海外の研究者も含めて利用できるような形で提供していくことが、われわれにとって、これから大きな課題です。すでに工学系では達成されているし、もちろん博物館のほうもデジタルを通じてやっているわけですが、全学的にさまざまな学術資産をどうやって広い範囲に利用できるようにしていくかというのも大きな課題だと思いました。本当に私としても不勉強だったのですが、ずいぶんさまざまな試みがすでになされているということには、大変力強く感じました。

また、図書職員の方というのは、日常業務だけで手いっぱい、とても他のことまでは難しいのではないかという思いが常にあったのですが、工学系では統合の機会を生かしてということだと思いますが、積極的に資料の調査、保存ということをなさっているっていうのは、本当に素晴らしいことだと思います。別に教員だけが学問を担うわけではなくて、やはり大学教職員全体として、学問をわれわれは担っていかなくてはいけないわけで、協働して、一緒に力を合わせてやっていく必要というのをあらためて感じました。

質疑のほうで、仕事を横に展開していくっていうのが一つのキーワードになっていましたが、確かに横に展開していくって、もちろん制度も改めるべきところは改めなきゃいけないけれども、制度的な壁を言い訳に仕事をやめないで、とにかく横に、なるべく人同士のつながりで仕事を展開していく、目標に向けて、目標もたぶん人によって少しずついろんな思いはあるのでしょうけれども、ここにある学術資産を大事にして、そのさらなる活用を目指していくっていうことで、横の連携というのをこれからも大事にしていけたらと思います。

あらためてそれぞれの場所で仕事をなさっている方の個人的な意欲に依存するところが大きいことも感じました。学問は結局はそれぞれの人間の個人的な意欲がないと先に進んでいかないものですが、学術資産についても、あらためてそのことを確認できたのが、私としては大変勉強になりました。

それでは、ちょうど予定時間となりましたので、ここで終了したいと思います。最後にちょっとだけ話題に出ていた、我々のいる場所を紹介します。ここは工学部11号館1階のHASEKO-KUMA HALLという所です。こちらの上にちょっとだけ展示が見えるかと思うのですが、私たちの目から見える壁面には、一面に工学部の学術資産が詰まっています。こういう素晴らしい場所を使わせてくださったことに、今担当者は市村さんなのですが、市村さんと、あとは、工学系研究科の皆さんにあらためて感謝したいと思います。ちょっとコロナ状況が改善したら、ぜひ皆さん、そこにロボットもおりますし、足を延ばしていただければと思います。市村先生、寺田先生、尾上先生、どう

もありがとうございました。また、ご協力いただいたスタッフの皆さん、
もうもありがとうございました。それでは、これで終わりたいと思います。ご
参加くださりありがとうございました。